はじめに

学校臨床総合教育研究センター長　近藤邦夫

本年報は，本センターの第1期プロジェクトのテーマである「いじめ問題の解明と解決策の探求」に関連して1999年度に行った講演会や研究会やシンポジウム，及び附属中・高等学校内のセンター分室の活動の概要を記したものである。

この年度は，第1期プロジェクト（1997年～1999年）の最終年度にあたる。研究会の内容も，昨年度までの基礎的・理論的なものから，実践的な解決策にかかわるものへと重点が移った。小学校や中学校の教師による優れた取り組み，心理臨床領域の人達による新しい試み等，刺激的な実践に出会い，学ぶことができた。

また，今年度は，外国人客員教授として，コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのルネ・ヴィンセント・アルシラ助教授とエジンバラ大学のパメラ・マン教授をお招きすることができた。アルシラ教授からは，これからの教育が直面せざるをえないニヒリズムの問題について根底的な議論を提起していただき，一方マン教授からは，いじめ問題の解決に関して先駆的な研究と実践を展開してきたスコットランドの現状を丁寧に紹介していただいた。細々とした規模ではあるが，実践的な教育研究をめぐって，国際的なネットワーク，実践者と研究者のネットワーク，そして学際的なネットワークができあがる鼓動が聞こえてくるようである。ちなみに，我々の研究会に出席したマン教授は，現場の教員やカウンセラーや様々な領域の研究者が集まって「いじめ」という問題に取り組んでいる姿を見て，「驚き」の声をあげておられた。彼女の驚きから，「垣根」を越えた交流は，どこの国でも難しい課題なのだと，あらためて感じさせられた。それだけに，このような交流を可能にする(本センターのような)システムと，それを支える粘り強い地道な「努力」が大切なのだと，あらためて，痛感している。

なお，この第1期プロジェクトの研究成果は，「学校臨床研究」第1巻（第1号～第5号）として，近々，刊行される予定である。

最後になったが，この3年間，客員教授として我々の研究に協力して下さった浜田寿美男先生（花園大学）と清永賢二先生（日本女子大学），研究員として教育現場と研究科の間を精力的につないで下さった高橋均先生（附属中・高等学校），協力研究員として我々に様々な知見を提供して下さった現場の先生方，そして附属中・高等学校の皆様に，心から感謝の意を表します。